

Hermai 「ヘルメース石柱像」に刻まれた金言

水谷 智洋

2000年9月に学習院大学で吉田育馬氏の「ギリシア・ローマのことわざ」と題する研究発表を拝聴したときのこと、あとの質疑応答で、「古代ギリシアでは、道路や家の戸口などに神像が立っていて、その上に金言や格言などが刻んであったと書物にあるのですが、具体的にどんな文句が記されていたのでしょうか。」との質問が出た。発表者の調べは、あいにく、その方面にまでは及んでいなかった。そこで別の聴衆から、「それは Hermai と呼ばれるヘルメースの石柱像のことでしょう。」との助け舟が出されたが、それも刻文にまでは及ばなかった。そのとき私はといえば、そういえば、ずっと以前、ある百科事典の「ヘルメス」の項をつづる際、いろいろ参照した書物のなかでそういう趣旨の記述を見かけたなあ、という漠然とした記憶がよみがえった程度であった。だから、あえて口出しすることもなかったのだが、つい、「Pauly の『古代学辞典』(A. Pauly, G. Wissowa u. W. Kroll (edd.), *Realencyclopädie d. cl. Altertumswissenschaft*, 1893 - (以下 *RE*)) を見れば分かるかもしれませんから、調べて差し上げましょう。」と口走ってしまったのは、少人数の研究会の at home な雰囲気さそわれてのことにはちがいない。私は、その結果、質問者の名刺を頂戴してしまったのである。

その夜、帰宅した私は、早速、手元の参考書をのぞいてみて、Hermai の刻文への言及が見られる書物を、都合 5 点見付けた。年代順にあげると、H. T. Peck (ed.), *Harper's Dict. of Cl. Lit. & Antiquities*, 1896, s.v. Hermae, 'sometimes they were inscribed with apothegms and riddles.' P. Harvey (ed.), *The Oxford Companion to Cl. Lit.*, 1937, s.v. Hermae, 'some of them inscribed with moral precepts.' K. Ziegler u. W. Sontheimer (edd.), *Der kleine Pauly*, 1979, Bd. 2, s.v. Hermai, 'mit einer meist epigrammat. Inschr.' また「百

科事典」以降のものとして、M.C.Howatson (ed.), *The Oxford Companion to Cl. Lit.*, 2nd ed., 1989, s.v. Hermae, 'At Athens some were set up c. 520 BC by Hipparchus, son of the tyrant Peisistratus, with moral maxims engraved on them.' H.Cancik u. H.Schneider (edd.), *Der neue Pauly*, Altertum, Bd.5, 1998, s.v. Hermen, 'als Hipparchos 130 H. mit Sinnsprüchen an den Strassen aufstellen liess.' しかしながら、apothegm なり Sinnspruch なりの実例は、*Companion* 程度では望むべくもないとしても、Pauly の名を冠した比較的近年の 2 書にも、一つも見出されない。やはり、本家の Pauly を見る他はない、と思われた。

ところが、その翌週、しかるべき図書室で *RE VIII*, 1912 の Hermai の項 (S.Eitrem 執筆) に目を通してみると、意外にも、こちらの欲しい情報は次の一文のみであった。

'Vor allem sind sie aber aus Athen bekannt, wo Hipparch, Sohn des Peisistratos, an den Wegen von der Hauptstadt nach den verschiedenen Demen H. mit Distanzangaben und schönmoralischen Denksprüchen versehen aufgerichtet hatte, in sicherer Fühlung mit der konservativen und populären Kultuspolitik seines Vaters (Plut. Hipparch p.228d. 229ab. Anth. Plan. IV 254ff. CIG 12. 6022. Suid. Harpokr. s.v. Hesych. s. 'Ἰπάρχειοι Ἑρμαῖ).' (Sp.701) ²⁾

ものはついでである。C.Daremberg et E.Saglio (edd.), *Dict. des antiquités grecques et romaines*, III/1, 1900 の Hermae の項 (P.Paris 執筆) ものぞいてみたが、事情はほとんど変わりがなかった。

'En Attique, Hipparque, fils de Pisistrate, avait fait dresser des hermès sur les routes qui allaient dès demes à Athènes, à mi-chemin; et pour que le voyageur, s'arrêtant pour vérifier le nombre de stades qui le séparaient de la ville, tirât encore quelque profit de sa halte, sur le marbre était aussi gravé une sentence, une énigme, un précepte de bonne morale, concentré en un vers rapide¹⁰.

10 Suid. Harpocrat. s.v. Ἑρμαῖ ; Hesych. s.v. Ἰπάρχειοι Ἑρμαῖ ; Plat. *Hipparch*. p.228 D, 229 A, B. *Anthol. Plan.* IV, 254, 255, 256. *Corp. inscr. graec.* nos 12 et 6022.' (p.131)

これにより判明するのは、Paris も Eitrem も全く同一の典拠に基づいて記述しているのであるから、金言・格言の実例を探すには、その典拠の各々にあた

るしかないということである。そこで、以下はその調査の簡単な報告となるのであるが、これは、本来、研究会での質問者への私信たるべきものである。それをあえて本誌での公表をお願いするのは、その内容が本会の「目的」(会則第2条)に大きく逸れるものではないだろう、との希望的観測によっている。会員諸氏のご諒恕を請う次第である。

まず結論を先に言ってしまうと、われわれが知り得る Hermai 上の金言・格言は、僅か2例しかない。それは、Platon, *Hipparkhos* 228d–229b でソークラテースの口を借りて紹介される次の二銘文である。

μνήμα τόδ' Ἰππάρχου στείχε δίκαια φρονῶν.

これぞヒッパルコスの記念。正しき思慮をもって歩め。

μνήμα τόδ' Ἰππάρχου μὴ φίλον ἐξαπάτα.

これぞヒッパルコスの記念。友をあざむくなかれ。

これらは、ヒッパルコスが他から学んだか、あるいは自ら見出した知恵のなかから、最も賢明なものを選び、自分で *elegeion* に直して刻ませたものと語られている。ただし、*Hipparkhos* に関しては、現在では多くの学者がこれをプラトーンの実作ではないとしており、一連の記述にどの程度の信憑性が認められるかは定かでない³⁾。とはいえ、後1世紀の学者トラシュロス *Thrasyllus* によるプラトーンの実作の4分類のうち、第4のグループに *Hipparkhos* が入っている (*Diogenes Laertios* 3.59) ところから推して、この作品は古代に必ずしも偽作扱いされていたのでもなさそうである。そこでわれわれは、ヒッパルコスがアッティカ地方の各所に Hermai を建てさせたという業績が歴史的事実か否かの詮索はさておき、上の二つの *elegeion* の後半部分については、古代人はこれを Hermai 上の銘文としておかしくはないものと受け止めていた、と理解しておこう。

次は *Anthologia Planudea* 中の三篇の詩であるが、4.254 は4行の *elegeia*、4.255 は7行の *iambic trimeter*、4.256 は6行の *elegeia* で、いずれも作者不明である。このうち 254 の第4行には、「「山羊の泉」まで7stadia」という Hermai 上の銘文らしい語句が見られるものの、ことわざ研究家の興味をひくような金言・格言は、残念ながら、三篇の詩中には見出されない⁴⁾。

Suid. Harpocrat. s.v. Ἑρμαῖ と Hesych. s.v. Ἰπάρχειοι Ἑρμαῖ も、後者に ἐγγράφας εἰς αὐτάς (= Ἑρμαῖ) ἐλεγεία の語句が見える程度で、ἐλεγεία そのものは伝えていない。

残るは *CIG* (A.Boeckh et al. (edd.), *Corpus Inscriptionum Graecarum*, 1827-77) の 22 および 6022 である。この集成には 1977 年に Olms 社から reprint が出ているので、今では稀観書というにはあたらないかもしれない。とはいえ、ごく一部の大学にしか蔵されていないらしいので、22 および 6022 は明らかに金言・格言の類を含むものではないけれども、ここに引いておこう⁵⁾。

22

ἐν μέσσω γε Θρήης τε καὶ ἄστεος, ἄνερ, ὄθ' Ἑρμῆς.

これには、Ex Fourmonti schedis, ubi notatur “En τῷ χωρίῳ τοῦ κουρσαλας in Attica.” と注が付されているが、Fourmontus は未詳。hexameter 中の Θρήη は Ἑλευσίς 北東の町、ὄθ' = ὄδ'、また Plat. *Hipparkh.* 228e-229b ἐν μὲν τοῖς ἐπ' ἀριστερὰ τοῦ Ἑρμοῦ ἐκάστου ἐπιγέγραπται λέγων ὁ Ἑρμῆς ὅτι ἐν μέσσω τοῦ ἄστεος καὶ τοῦ δήμου ἔστηκεν が参考になろう。

6022

Ἄλκιβ[ιάδης.

εἰσὶν μοι δυ' ἀδελφοὶ ὁμων[ύμ]οι δυ' ὅμοιοι,
οἱ μέχρι μὲν ζῶουσι, τὸν [ἦλι]ον οὐκ ἔσορῶ[σιν],
αὐτὰρ ἐπὴν ...

これには、In herma Alcibiadis reperto in hortis Marchionis Fonseca in monte Coelio, nunc in Vaticano; edidit Viscontus ... との注があり、Viscontus はこの何行かの hexameter を宴会で楽しむ謎々と解した由である。

かくしてわれわれは、Hermai に刻まれた金言・格言として一文献からの 2 例を知るにとどまるのであるが、この調査は *CIG* の後継者である *Inscriptiones Graecae*, 1903-には及んでいない。また、*Supplementum Epigraphicum Graecum*, 1923-にも及んでいない。したがって、金言・格言つきの Hermai の発見の報告が、1912 年以降、どこかでなされている可能性もなしとしないのだ

が、いかんせん、筆者は碑文資料に暗い。もしも拙文がどなたか、この方面に明るい方のお目にとまり、なにかご教示をいただけるようなことがあれば、望外の幸せとしなければならぬであろう。

注

- 1) 名刺にあった「ことわざ研究会 時田昌瑞」氏のお名前は、その直後（2000年10月）に刊行された『岩波ことわざ辞典』の著者名として再認識することとなった。その後も、朝日新聞日曜版に2001年1月(?)から連載されている「旅のことわざ」の筆者として、ますます親しいものとなった。
- 2) ここに挙げられた典拠中の Plut. は Plat. の誤り。
- 3) *The Oxford Cl. Dict.* が一貫して (1st ed., 1949 s.v. HERMAE, 2nd ed., 1970, s.v. HERMS, 3rd ed., 1996, s.v. herms) Hipparkhos の名を出さず、Hermai 上の刻文にも言及しないのは、*Hipparkhos* がプラトーンの実作ではないと見られていることとなんらかの関係があるのであろうか。
- 4) D.L. Page, *Further Greek Epigrams*, Cambridge, 1981, p.380 は、4.256 についてこう言う。‘The epigram, if not inscriptional, may have been inspired by an actual statue of Hermes in the hills—a most unusual place for him, as the epigram says.’ 私も、これが inscriptional とはとても思えない。
- 5) 22 は Vol. I, A. Boeckh (ed.), 1828, 6022 は Vol. III, I. Franz (ed.), 1853 に収められている。なお、*CIG* からのコピー入手には、東京大学文学部西洋史学科の成川岳大氏のお手を煩わせた。記して謝意を表明する。